

マタイによる福音書5章43-58節 「敵を愛しなさい」

**1A パリサイ人と律法学者の教え 43**

1B 「隣人を愛しなさい」

2B 「敵を憎みなさい」

**2A 主イエスの教え 44**

1B 「敵を愛しなさい」

1C *ダビデの模範*

2C *ヨブの訴え*

3C *ダビデの詩篇*

4C *ソロモンの知恵*

2B 迫害者のためへの祈り

**3A 天の父の恵み深さ 45**

1B 父に倣う

2B 自分を無くす

**4A キリスト者の特異性 46-47**

1B 自分からの自由

2B 道徳以上の行為

**5A 天の父の完全**

1B 神に似た者

2B キリストへの信仰

**本文**

マタイによる福音書 5 章を開いてください。私たちの山上の説教シリーズは一つの山場を迎えます。それは、キリスト教が何であるかを世界に知らしめた主の言葉です、「敵を愛しなさい」です。

43 『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。44 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。45 天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。46 自分を愛してくれる人を愛したとしても、あなたがたに何の報いがあるでしょうか。取税人でも同じことをしているではありませんか。47 また、自分の兄弟にだけあいさつしたとしても、どれだけまさったことをしたことになるでしょうか。異邦人でも同じことをしているではありませんか。48 ですから、あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい。

イエス様は、38節から既に、赦し、愛するキリスト者の生き方を語っておられました。復讐は主に任せて、悪に対しては善で報いなさいということ語っておられました。右の頬を打つ者は左の頬も向けなさい。告訴して下着を取ろうとする者には、上着も取らせなさい。一ミリオン行きなさいと命じられたら、二ミリオン歩きなさい。求める人には与えなさい、という内容です。そして主は、そこからさらに一歩進んで、「敵を愛しなさい、迫害する者を祝福しなさい」と命じておられます。

### 1A パリサイ人と律法学者の教え 43

今の一連のイエス様の教えが、20節からの続きになっていることを思い出してください。「律法学者やパリサイ人の義にまかしていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」と言われたところからの続きです。律法学者が当時、聖書に何が書かれているか解釈している権威でした。そしてパリサイ人は、神の義について最も厳格に守っているとされている人々で、一般のユダヤ人に受け入れられていた人々でした。しかし、それ以上にならなければ、天の御国に入ることができないとイエス様は言われるのです。ですから、私たちが学んでいることは、「キリスト者の生き方は、世間で言われる単なる道徳や規律のことではない。」ということなのです。キリスト者であるからこそ守ることのできる、特殊な世界のことをイエス様が語っておられるということです。

そこで主は、他の教えと同じように、初めに律法学者とパリサイ人が行っていることを引用されます。「43『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。」と言われていました。「あなたがたは聞いています。」というのが、彼らが文書で読んでいるわけではないことを伺わせます。当時は巻物でしかないので、確かめようもなく、ゆえにラビ、教師の語っていることがなおのこと権威になっていたのです。そして、ラビが教えていたことは、口伝律法という、律法の解釈によるものが多かったのです。ですから、これも聖書の言葉ではありません。けれども、聖書のどこから来ているかは推測のできるものです。

### 1B 「隣人を愛しなさい」

「あなたの隣人を愛し」なさいは、レビ記にある有名な言葉です。「19:18 あなたは復讐してはならない。あなたの民の人々に恨みを抱いてはならない。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは【主】である。」これは、律法のままの教えだし、イエス様ご自身が、申命記にある、主なる神を愛しなさいと言う命令と共に、これで律法全体が成り立っていることを語られました。

### 2B 「敵を憎みなさい」

けれども、「あなたの敵を憎め」というのは、どこに書いてあるのか？よく分かりません。申命記23章に、アンモン人やモアブ人を集会の中に入れてはいけない、なぜなら、バラムを雇って、あなたがたを呪うように仕向けたからだ、ということをモーセが語っています。しかしそれは、復讐や憎しみではなく、あくまでもイスラエルが神に罪を犯さないようにするために、どんなに誘惑があっても拒否しなければいけないという、内向きの戒めです。相手に対するものではありません。

そしてダビデが、呪いの詩篇を歌っている部分があります。「139:21-22 【主】よ私はあなたを憎む者たちを憎まないでしょうか。あなたに立ち向かう者を嫌わないでしょうか。私は憎しみの限りを尽くして彼らを憎みます。彼らは私の敵となりました。」しかし、これらは自分に何かをされたから憎んでいるのではなく、主を憎んでいるという事に対する怒りを表しています。その証拠に、ダビデの生涯を思い出してください。彼は主に対して祈りの中で、呪いの祈りをしていますが、それは主に復讐を積極的に任せているのであり、実際の行いにおいては、むしろ悪に対して善で報いました。サウルに対して、またアブサロムに対してそうでした。あくまでも、神と自分との個人的な関係における祈りであり、対人関係のものではなかったのです。

このように律法学者やパリサイ人にある問題は、私たちにも身近なものなのです。主のことばを聞くのですが、いつの間にか自分たちが守ることができるように、少しずつ解釈を変えるのです。一見、彼らは厳格に守り、非常に道徳的に見えるのですが、実は自分にはどうすることもできない欲望や、利己的な思いはそのままにできるようにして守ることができるようにしています。福音に生きることは、実は、律法主義よりもはるかに厳しいのです。律法主義は自分というものを残したままで、いろいろな規則で自分を塗り固めることができます。福音は、その自分というものをキリストの十字架に付けてしまうことによって、御霊が働き、私たちの霊を一新して、それで神に従えるようになる、という類のものです。

## 2A 主イエスの教え 44

### 1B 「敵を愛しなさい」

そして彼らの教えと対比して、イエス様が強く命じられます。「44 **しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。**」イエス様は、決して律法の言っていることに違反したことを語っておられるのではなく、いや、むしろ律法が教えていることそのもの、その精髓となる部分を語っておられます。敵を愛するというのは、その行っている不義を是認することでは全然ありません。まさにパリサイ人たちに、主が語られている厳しい言葉があります。そして、彼らに対して八つの呪いをマタイ 23 章において宣言しておられます。それは、彼らが神に立ち返ってほしいと強く願ってのことであり、彼らに対してではなく、彼らの頑なさに対して嘆いておられる箇所です。パリサイ派はイエス様を妬み、憎みましたが、イエス様ご自身は彼らを愛しておられました。その証拠として、十字架上から彼らのために祈られましたね、「何をしているのか、分からないのです。どうか彼らの罪を赦してください。」と。

### 1C ダビデの模範

それで、律法にかなっているというのは、旧約聖書の人物にも、敵を愛するということを行っている人物がいるからです。初めに、先ほど挙げたダビデ自身です。ダビデこそが、悪に対して善で報いた王、キリストを指し示す王でした。サウル王が認めたのです、「Ⅱサム 24:17-19 おまえは私より正しい。私に良くしてくれたのに、私はおまえに悪い仕打ちをした。私に良いことをしてくれたこ

とを、今日、おまえは知らせてくれた。【主】が私をおまえの手に渡されたのに、私を殺さなかったのだから。人が自分の敵を見つけたとき、その敵を無傷で去らせるだろうか。おまえが今日、私にしてくれたことの報いとして、【主】がおまえに幸いを与えられるように。」ダビデは、生涯サウルを愛し、サウル家を愛しました。ヨナタンの息子、メフィボシェテに対しても契約を守り、彼を自分の家で食事をさせ、地所を回復させました。

### 2C ヨブの訴え

ヨブが苦しみに会っている時に、彼はこう訴えています。「31:29 あるいは、私を憎む者が衰えたのを喜び、彼にわざわざ下がったことに心躍らせたことがあるだろうか。」コリント第一 13 章に、「愛は、人のした悪を思わない」とありますが、まさにこれです。災いが自分に敵対している者に襲っても、それを喜ぶことはない、ということです。

### 3C ダビデの詩篇

そしてダビデの詩篇そのものの中にも、自分に悪くする者に対して善を行う内容のものがあります。「詩 35:11-14 悪意のある証人どもが立ち私が知らないことを私に問います。彼らは悪をもって善に報い私のたましいは見捨てられています。しかし私は彼らが病のとき粗布をまといました。私は断食してたましいを苦しめ私の祈りは胸の中を行き来していました。私の友や兄弟であるかのように私は足を運び母の喪に服するようにうなだれて泣き悲しみました。」

### 4C ソロモンの知恵

そしてソロモンも知恵をもって箴言で教えています。「25:21-22 あなたを憎む者が飢えているなら、パンを食べさせ、渴いているなら、水を飲ませよ。なぜなら、あなたは彼の頭上に燃える炭火を積むことになり、【主】があなたに報いてくださるからだ。」

このようにして、敵に対して、その不義に報いてくださいという祈りは主にに対してしても、主に裁きを任せたとゆえ、むしろ心は自由になり、主が命じられている「善を行いなさい」という命令に従えるようになれるのです。

ここで大事なのは、「敵」に面した時、それを「自分と敵」との関係だけで考えない事です。むしろ、自分のことを考えずに、神にそのことはお任せします。すると、神がその人に対してどのようなことを思われているかを、少しずつ見る事ができるようになります。感じる事ができるようになります。相手がなぜそんなことをしてしまっているのか、理解し、想像する事ができるようになります。そうすると、主の、ご自身に反抗する者たちに対する憐れみを思い出せるようになります。主の心を深く知ることができるようになります。また敵はサタンであり、敵対している本人ではないことも知ることができます。自分とその相手、という図式から離れて、神とその相手との関係の中で見る事ができるようになるのです。

そしてもう一つ大事なものは、「愛する」というのは「好きになる」というのと違うことです。愛は、意志です。コリント第一 13 章にあるように、親切、忍耐、悪を思わない、高ぶらない、など、意志を使って行うものです。感情が嫌いだとか、否定的なことがあっても、それでも主がその人を愛しておられるのだから、私も愛しますという意志なのです。

## 2B 迫害者のためへの祈り

そこでイエス様は、具体的に敵を愛する方法として、「自分を迫害する者のために祈りなさい」と教えておられます。祈りというのは、とても強い武器です。私たちは自分の心に語っている間は、悪いことをしてきた人のことを沸々と溜めていってしまいますが、その人のことを祈れば、相手は神ですから、神の慈しみ深さにそのまま触れるので、その祈りも祝福を願うようになります。神に祈ること、願うことの大切さをヤコブが教えています。「4:2 あなたがたは、欲しても自分のものにならないと、人殺しをします。熱望しても手に入れることができないと、争ったり戦ったりします。自分のものにならないのは、あなたがたが求めないからです。」

## 3A 天の父の恵み深さ 45

そしてイエス様が、敵を愛しなさいと命じられた根拠を教えてください。「45 天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。」非常に分かり易い事実ですね。天と地を造られた神は、悪人だけに雨を降らせなかつたりしません。ですから、同じようにして悪人に対しても、良くする、恵みを与えるのです。

## 1B 父に倣う

ここに大事なことが出て来ました、「天におられるあなたがたの父の子どもになる」ということです。なぜイエス様が、私たちに「天にいます、我らの父よ」と祈りなさいと命じられたのかが分かります。主にとって、天地を創造された神は父なのです。永遠の昔から父のふところにおられた方です。ですから、天地を造られた神であり、無限の方であり、私たちは蟻よりも小さいような有限の存在なのですが、それでも父としてあがめることができるようになるのだよ、と言われます。それが可能になるのは、イエス様が私たちの罪のために死んで、そして甦られたからです。そのことによって、私たちが、キリストにあつて神の養子縁組に入ることができました。主が神の独り子であられますが、その父子の関係の中に、養子縁組で私たちも入ることが許されています。

ゆえに、神を父と呼べるようになります。そして、父と呼ぶのは、そのような親密な関係に入っているということだけでなく、倣うべき存在、従順になるべき存在なのです。私たちは大人なので、どうしてもこのことをするのが肉が嫌だと言ってしまいますが、子どものようにならないといけないのです。分からなくとも、自分の知性や理性では、おかしいと思っても、「お父さんが言っているから」という理由だけで、従います。パウロもエペソの信徒たちにこう書きました、「エペ 5:1-2 ですから、

愛されている子どもらしく、神に倣う者となりなさい。また、愛のうちに歩みなさい。キリストも私たちが愛して、私たちのために、ご自分を神へのささげ物、またいけにえとし、芳ばしい香りを献げてくださいました。」

## 2B 自分を無くす

このようにして、福音の中に生きるのと道徳の中に生きるの違いがお分かりになったでしょうか？福音、良い知らせの中に生きるとは、神につながって、神と交わって、それでその交わりにある命と力によって行うことなのです。自分が行っている時に、その力と知恵は自分のものではなく、自分が神に満たされているからできていることなのです。神の力と知恵なのです。私たちが、神に満たされ、聖霊に満たされるために必要なのは、当たり前のことですが、「自分が空になる」ということです。しばしば、「自分に死ぬ」とか「自分を捨てる」という言葉を聞くと、自分を卑しめるというように聞こえます。自分の人格や人柄までを抑圧するようにさえ聞こえます。

けれども、「自分を忘れる」「自分を無くす」というような表現のほうが、もっと本意に近いかもしれません。自分の好きな人がいて、デートをするというような時に、相手のことをいつも考えて、自分のことを考えている暇はありませんよね？あの状態です、イエス様が好きで、イエス様に従いたいと願って、それで、自分がどうなのか？ということ忘れてしまうのです。

## 4A キリスト者の特異性 46-47

そこでイエス様は、いわゆる道徳上の愛、パリサイ人たちの解釈していたような愛と、ご自身が言われていることの愛を比べておられます。「**46 自分を愛してくれる人を愛したとしても、あなたがたに何の報いがあるでしょうか。取税人でも同じことをしているではありませんか。47 また、自分の兄弟にだけあいさつしたとしても、どれだけまさったことをしたことになるでしょうか。異邦人でも同じことをしているではありませんか。**」

## 1B 自分からの自由

隣人を愛して、敵を憎めというのは、まさに「**自分を愛してくれる人を愛した**」「**また、自分の兄弟にだけあいさつした**」ということに他なりません。そしてイエス様は、教えられる時に、あまりにもはっきりした形で教えられます。彼らが忌み嫌っている取税人と異邦人とで比べているのです。取税人はローマの犬です。ユダヤ人の共同体の中に入れていない人々です。そして異邦人は、同じように犬のような存在です。けれども、彼らの中でさえ自分によくした人には良くする、兄弟、つまり仲間には挨拶をするということをします。これを私たちに言いかえるなら、ヤクザの人でさえ仁義があり、倫理基準があります。

## 2B 道徳以上の行為

ここでの特徴は、先にも話しましたが、「自分」が出発点になっていることです。自分を愛してくれ

ている、自分の兄弟に、というように、自分が起点となっています。これが道徳の限界です。自分から始まっているので、どうしても、それ以上に広がりを持たないのです。しかし、主は、その自分から自由になる福音を持っておられます。それは、父なる神の中に生き、その愛の中に生きられた方が、ご自分を無にして仕えられました。その愛に私たちを導き入れられているので、私たちも、自分から自由になれます。福音に生きるとは、自分ではなく、神がキリストにあって圧倒的に示された大きな愛に感動し、応答することです。なので、自分が出発点にならず、神とキリストが出発点になるのです。

## 5A 天の父の完全

そこで主は言われます、「48 ですから、あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい。」

### 1B 神に似た者

先ほど話しましたように、父なる神なので、それに似た者になりなさいということです。けれども、その神は完全だということですね、だから完全でありなさいと言われるのです。これには参りますね、道徳の世界では全くなく、それから宗教の世界でさえありません。神により近づいて、神のようになりたいというのが宗教ですが、完全には到底なれないではないですか？自分ができる代物ではないことをここで悟らないといけません。

ちなみに、ここの「完全」は、「全き者」と言い換えた方が分かりやすいと思います。真つ当な人生を送ったみたいの意味合いです。完璧というより、十全というような意味合いです。十分に、全うするというような意味合いです。ですから、人を愛することについて、「このくらいやってあげばいいだろう」では全くないんですね。絶えず、自分の至らなさを自覚し、神の憐れみにすがり、祈り求めることなのだということが分かります。「ピリ 3:12-14 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして追求しているのです。そして、それを得るようと、キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えるはいけません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。」

### 2B キリストへの信仰

パウロは興味深いことを話しています。すでに得たのではない、すでに完全にされているのではない。けれども、得るようと、キリスト・イエスが既に私を捕えてくださった、というのです。自分自身はまだ得ていないのに、キリストは既に捕えておられる。矛盾するようですが、これは一貫しています。それは、私たちはすでに、信仰によって義と認められているのです。「ロマ 3:22-24 すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差

別はありません。すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。」

ですから、キリストにあって神は私たちを、全く罪を犯したことの無い者とみなしておられるのです！では、今、私たちは完全ですか？全然、ですね。けれども、すでにそのようにみなしておられる、キリストが私たちの内に住んでおられる。神の御霊に従うことによって、キリストが私たちの内で働いてくださり、それで自分ではできなくなっていることを、して下さるのです。そこで大事なものは、自分が十字架に付けられている、すでに罪に対して死んでいるとみなすことです。自分は死に、甦られたキリストにあって新しい者にされたのだとみなすことです。そして、終わりの日にキリストは戻って来られて、この体でさえ一瞬にして変えられるのだ、ということです。完全を目指します、もう、すでにそうされているのですが、その完全に向けて走っています。

興味深い逸話があります。卓球選手で伊藤美誠さんがいますね。お母さんの教育がすごいのです、まだ妊娠している時にも卓球で勝つことを語り始めたという凄い方です。そして彼女がまだ幼い時に、こう考えていたそうです。「中国に勝つためにやっていたら超えられない。中国を超えてないと。」と、すでに勝っている姿を見ながら、猛特訓をしたそうです。今の彼女の、試合の時に中国選手を見ている鋭い目は、既に勝っている姿を見ているからそうなっているということです。同じようにパウロは、賞を見ながら走っているということです。私たちがここで満足してはいけない、キリスト者として、愛の中に生きるということについて、再び霊で燃やしていただき、神に熱心に使い、兄弟愛を抱き、敵に対しては善で報います。